

レドモ樓閣ノ形象ヲナスハアヤシムベシ、

〔東遊記〕^三唇氣樓 唐土の詩文にも、多く作りてもてはやせる、唇樓といふことあり、又海市ともいふ。^{○中略}我國は四方皆大海にて、何れの國の人も海を見ざる者もなきに、此唇氣樓は甚稀なり、只越中の魚津といふ所に、毎年三月の末より四月の間に、天氣殊にのどやかにして風收り、海上霞渡りて、一面の鏡の打曇れるがごとき日に、此唇氣樓をむすぶ、毎年一兩度、或は多き年は、三四度も結ぶ事あり、殊に唐土の人のいへる如く、海上に煙の如く雲の如く、次第にむすび來りて、遂には樓臺の如く、或は城廓の如く、人馬往來せるが如きも、歷々然として見ゆ、北地に我親しく交りし、宮島式部大夫と云社人は、折よく魚津にて是を見たり、初は幕を引るが如くなりしが、しばらく見る間に、城廓の如く、矢倉高塀やうのものも見え、矢間などの如きものも見えしが、又暫する間に、松原の如く、繪に書る天の橋立などのやうに見えし、夕暮に及び風少し出たれば、漸々に消失て跡かたもなくしなり、富山よりは纔に六里を隔てたる所なれば、城下の人々皆見物したく思へども、何時に結ぶもえれがたく、又むすびたる時、急に人して告しらすにも、其間には消失て見るべからず、此ゆゑに魚津近所の海邊の人は、例年見る事なれど、二三里を隔てたる地方の人は、一生涯つひに見ざる人多し、余^{○南}餘^{○橋}が越中にありし時も、三四月の間を魚津に逗留して、唇樓を見るべしと、人々にすゝめられ、余も亦年頃の望なりしかど、富山にありし頃は正月二月なれば、それより三四月まで越中に逗留せん事、あまり永々しければ、残念なりしかども、見ずして越後にこえたり、越後の糸魚川にて、松山茂叔に此事を語りしに、此人も糸魚川の海中遙に山の出來たるを見たり、漁人のいひしは、これは鹽山といふものにて、折々見ることなりといひしと語られき、余初め唐人の作れる詩杯を見て思ひしは、唇樓は大洋にある事にて、陸地近き入り海には、なきことのやうに心得しが、魚津の地理を見るに、左にはあらず、魚津は北海に臨める